



## 平安拾遺譚 cirque de kyoto

Heian Shuitan -Cirque de Kyoto-

### 【開催概要】

開催日時: 2021年12月26日(日) 14:00~16:00

会場: 平安神宮 神苑(尚美館)

参加対象: どなたでも

料金: 無料

申込: 事前申込及び当日申込

来場者数: 181名

脚本・演出: 高橋 浩

古典芸能監修: 小笠原 由詞

サーカス監修: QUMIKO

演奏: 稲葉 明徳、三原 智行、イガキアキコ、李 知承、遠山 貴志

声 明: 小笠原 彩乃

出 演: 藤原明衡/小笠原 由詞

後白河天皇/小笠原 弘晃

右衛門尉/青山 郁彦

右衛門尉の妻/小笠原 尚子、杉本 茜

家族/白井 宏幸、前川 剛志、大森 紗紀、武田 和也、小川 希美恵、

谷内 尚子、宝生 紗樹

猿楽師

網渡り/清水 ヒサヲ(クロワッサンサーカス)

軽業師/ケンタ(クロワッサンサーカス)

品玉師/わっしょいゆ〜た

幻術師/松原 俊之

楽師/稲葉 明徳、関 俊弘

衣裳: 落里美、森本 智子

音 響: 武田 雅典、鈴木 信司

音 楽: 稲葉 明徳、三原 智行、小笠原 由詞、山本 恭司

舞台監督: 伊藤 薫

制作: 田中 麻琴、若旦那 家康

制作助手: 吉田 風詐、宇垣 サグ

運営補助: 山本 恵子

インターン: 松下 萌々子

企画・運営: 株式会社井筒企画

協力: 平安神宮、京都府神社庁、井筒グループ

### 【プログラム概要】

現代につながる大衆芸能のルーツである「猿楽」の高いエンターテインメント性を活かした京都ならではの現代的な芸能「cirque de kyoto(京都のサーカス)」の創作を通じて、平安時代から京都の人々が担ってきた文化創成のプロセスそのものの具現化に取り組みました。

平安文化とされる和歌や雅楽などの貴族文化に対するアンチテーゼとして確立された藤原明衡著の『新猿楽記』と後白河法皇編纂の『梁塵秘抄』。両者には、庶民の混沌とした多様性の中から生まれる文化への深い理解と愛情が充ち溢れていました。

本作品では、この2つの古典文学をモチーフに、両文学に共通するテーマである「多様性」をパフォーマンスとして表現しました。そして信仰の場所である神社が、古来身分や階級、人種に関係なく、多様性に富んだ人々を受け入れることで、文化の集積・発信地として機能していたことから、平安京を象って創建された平安神宮・神苑を舞台に繰り広げました。

### 協力内容について

#### 平安神宮

平安神宮は1895年(明治28年)に平安遷都1100年を記念して、平安京大内裏の正庁・朝堂院を実物の8分の5の規模で復元したものです。祭神は平安京を建都した桓武天皇と平安京最後の帝である孝明天皇が祀られており、古来神社の境内は「猿楽」等の催事を行う場所として、傀儡子や白拍子等に提供されてきた長い歴史を持つなど、本作品が表現する時代背景を象徴しています。そこで、平安神宮の神苑を公演会場として利用させていただき、宗教施設としての神社ではなく、古来文化の集積・発信地として機能してきた神社を、「cirque」に込められた文化創成以前の混沌を受け入れる場と位置付けてクリエーションを行い、作品が伝えるべき精神風土を共有できる環境を観客に提供いただきました。

#### 京都府神社庁

2019年度に始まった「新猿楽記～cirque de kyoto～」の創成事業以来、古来文化の集積地として機能してきた神社の「猿楽」という大衆芸能を上演する場としての役割や、神社と芸能との関係性を紐解くための情報、資料等のご提供をはじめ、京都の文化資源活用観点から、創作やワークショップの稽古場としての施設の提供など、様々な形でご協力いただいた京都府神社庁には、プロジェクト最終年となる今年度、4か年の集大成となる作品を上演するにふさわしい会場として、平安神宮をご推薦いただき、上演実現に向けた様々な調整にご尽力いただきました。

#### 井筒グループ/株式会社Izutsu Mother

井筒は、1705年の創業以来300年以上に亘り、一貫して仏教や神道の宗教儀式で用いられる伝統的な装束や、宗教関係用品の製造・販売を行っています。現在は、商品の販売・レンタル、コンサルティングやプロデュースなど、事業領域を多方面に拡大し、取扱商品も従来の宗教関係用品だけでなく、古典的美術工芸品や博物館の展示物、映画、演劇への衣裳提供など多岐に渡っています。この度のパフォーマンスの創成にあたり、平安末期に猿楽者や後白河天皇が身に付けていたと思われる様々な装束を、出演者の衣裳として提供する他、四神幡等、特殊な造形を美術として提供しました。

## Event Outline

This project engaged in actualizing the very process of creating culture, which the people of Kyoto have been undertaking since the Heian period a thousand years ago. Through producing the distinctively Kyoto style of modern performance that is Cirque de Kyoto, which utilizes the highly entertainment qualities of *sarugaku*, a traditional theater form to which Japanese popular performing arts continuing today trace their roots. Cirque de Kyoto explored the theme of diversity, as shared by the two classical literary works that inspired it: *Shinsarugakuki* by Fujiwara no Akihira and *Ryojinhisho* by Emperor Go-Shirakawa. This performance was staged in Shin-en Garden at Heian Jingu Shrine—originally designed in the style of Heian-kyo—in reference to how Shinto shrines, having accepted a wide range of people regardless of status, class, and race since ancient times, functioned as places not only for worship but also for accumulating and disseminating culture.

### 作品について(脚本・演出の視点から)

一般に平安文化として認識されている和歌や雅楽などの、いわゆる貴族文化に対するアンチテーゼとして示された藤原明衡著の『新猿楽記』と後白河法皇編纂の『梁塵秘抄』。両者には、より技巧を凝らし、より高みを目指して究めようとする貴族主体の「孤高の文化」に対し、圧倒的多数である庶民の、混沌とした多様性の中から生まれる文化への深い理解と愛情に充ち溢れていました。今作品では、この2つの古典文学をモチーフに、それぞれに通底する、京都人(貴族・庶民)の中で渦巻く創成前の文化的混沌を[cirque]と位置づけ、混沌の中から創造される文化の象徴的表現としての[cirque de kyoto]のより深い文芸的コンセプトを提示することになりました。タイトルの「拾遺譚」には、貴族主体の文化に洩れた、多様性にあふれた民衆文化を拾い集める意が込められています。『梁塵秘抄』に記された白拍子や遊女、傀儡子など、遠く散楽にルーツを持つ平安時代の芸能者たちが、作っては口伝で遺されてきた今様歌謡の「不思議な魅力」。『新猿楽記』に示された文化を創成する多様性に富んだ民衆の「熱」。これらを核に、今様や猿楽に象徴される文化の多様性と民衆の祈りを見つめ続け、こよなく愛した後白河法皇と、反骨の文化人・藤原明衡による、京都のボーダレスな文化創成の宴として「平安拾遺譚 cirque de kyoto」を創成し、平成30年から4ヶ年に亘って取り組んできた京都における文化創成のプロセスの解明と、その成果に基づく、新たな文化創造を目指す旅が、ここに結実しました。

『平安拾遺譚 cirque de kyoto』脚本・演出  
演劇プロデューサー・演出家  
高橋 浩



### 作品について(芸能監修・出演の視点から)

昨年度、仮面によるサーカスに取り組み、「仮面猿楽」の形態を提示しました。仮面には演者が別人格になる、あるいは仮面のキャラクターが演者に憑依するという一面があります。しかし、今年は荒天の影響もあり、安全性を考慮して仮面をつけずに演技することになりました。それでも、言葉も必要なく、平安時代の衣裳でも違和感なく楽しめる、サーカスというエンターテインメントはボーダレスな交流を促進するエネルギーに満ちています。これは「新猿楽記～cirque de kyoto～」の創成時に結論した、文化創成のプロセスに介在する「民衆の熱」と同様のものですが、今回、寒風と降雪という上演にリスクな環境のもと、PAもなく照明効果もない、まさに平安時代と同様の条件下で民衆の熱狂を獲得するには、演者自身が大量のエネルギーを必要とすることを肌感覚で感じ取りました。今回のパフォーマンスにより、いみじくも自身の肉体と表現力だけで民衆の熱狂を獲得する芸能の原点回帰が図れたことで、老若男女を問わず、国籍や人種を問わず熱狂し楽しめる芸能であり、多様性を体現する芸能である【猿楽=cirque】の創成に向けた貴重な足がかりとなる取組みとなりました。

「平安拾遺譚 cirque de kyoto」芸能監修・出演

和泉流狂言師

小笠原 由禰



## 作品内容詳細

計画当初は、拜殿前におけるサーカスパフォーマンス「ウェルカム猿楽」に始まり、会場となる神苑各所で猿楽のパフォーマンスを鑑賞した来場者が、尚美館を舞台に行われる後白河天皇による今様歌謡の音楽パフォーマンス「後白河拾遺譚」を鑑賞し、神苑出口で猿楽一座による「フェアウェル猿楽」で終演する構成で計画されていましたが、折からの寒波襲来と降雪という、屋外上演には厳しい環境となったため、来場者及び演者の安全や健康に鑑み、神苑内のパフォーマンスを「ウェルカム猿楽」に取り込み、神苑内での滞留時間をなるべく短くして、尚美館での「後白河拾遺譚」を堪能できるような構成を変更しました。

### ●ウェルカム猿楽

平安神宮正面下手に綱渡りの綱が張られ下手奥に三角トラスがそびえている。三角トラスの上では猿楽師が10mほどの細く白く長い布を平安神宮の上空にたなびかせている。辺りには猿楽の一座、彼らを取り巻く10名ほどの貴族たち、楽師が屯している。猿楽の一座は団長、鼓手、品玉遣い、軽業師、幻術遣い、綱渡りなど。その周りを貴族たち、楽師が囲みお目当ての猿楽師と雑談をしている。おもむろに猿楽を演じ始める猿楽一座の芸に、平安貴族たちはやんやの喝采を送っている。これは「新猿楽記」冒頭に描かれた猿楽描写のオマージュであり、平安貴族は「新猿楽記」に登場する右衛門尉一家をモチーフとしている。

### ●明衡登場

鼓手が太鼓を打ち鳴らしながら踊り始める。神苑出口の方より右衛門尉に導かれ藤原明衡が現れる。右衛門尉一家は「新猿楽記」を著した明衡を敬して出迎え、猿楽の団は控える。猿楽一座を労った明衡は、「新猿楽記」に記された数々の猿楽を解説し、その後、後白河天皇の神苑での宴の開催を予告して右衛門尉一家、楽師とともに神苑出口へ退出する。来場者はツアーコンダクターに導かれながら神苑入口から入って神苑巡りのひと時を楽しむ。

### ●尚美館パフォーマンス「後白河拾遺譚」

平安の芸能を俯瞰し後白河天皇と藤原明衡の文化・芸能拾遺の宴を繰り広げる。後白河天皇は自らの楽師達(バンド)を引き連れ、『梁塵秘抄』に集成された今様を、2020年度のクリエイションにおいて、山本恭司によって制作された楽曲によって謳いあげる。心の闇を照らす多様性に富んだ文化、芸能の力を誇らかに示し、弱きもの、小さきものへ向けられる限りない愛と祈りを、声明や音楽で構成したパフォーマンスが展開される。

### ●終演

後白河の宴「後白河拾遺譚」の終演にクロスして、観客に紛れて宴に参加していた右衛門尉一家が万歳楽を舞いはじめ、猿楽一座とともに乱舞を繰り広げながら来場者を出口へと誘い大団円を迎える。

『平安拾遺譚 cirque de kyoto』制作

プランナー

緒方 辰之介

